



INDEX

アートマップ / 開催概要 / 実行委員長挨拶

1年目

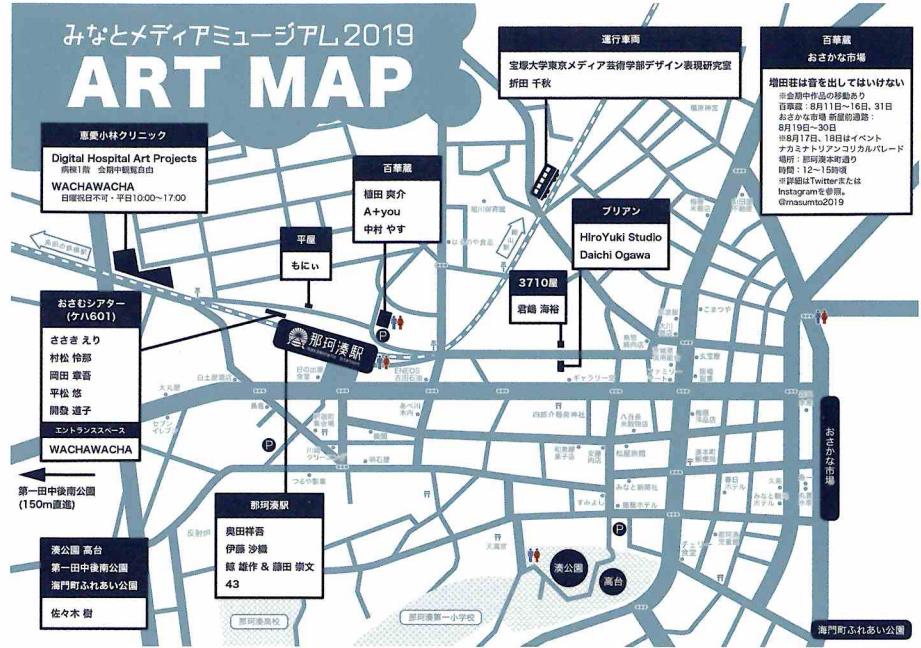
- 01 佐々木樹 /Miki SASAKI 「《Material poetry》—〈Topographic flags〉 | NAKAMINATO / high school (2019)」
- 02 増田莊は音を出してはいけない《あんこう♡もこもこ♡あんこう》
- 03 植田爽介 《C.C.W》
- 04 A+you 《運動と建築と子どもの夢》
- 05 奥田祥吾 《Feeling of the waves 2019 - 波と雲と心よ、融和せよ -》
- 06 折田千秋 《image picture》
- 07 君嶋海裕 《六脚ブロック積み木》
- 08 鯨雄作 & 藤田崇文 《ワキオコルトコロ》
- 09 Daichi Ogawa 《snow crystallography》
- 10 吉岡純希 《Digital Hospital Art》
- 11 HiroYuki Studio 《IN A DREAM》
- 12 もにい 《そして想像し違う》
- 13 WACHAWACHA 《発想はわちゃわちゃとしたところから》

2年目以降

- 14 伊藤沙織 《かっぱのきもち・おひとついかがですか》
- 15 おさむシアター
- 16 那珂湊第一小学校ワークショッププロジェクト
《ヘッドマークデザインワークショップ・BANKOKKI》
- 17 中村やす 《那珂湊はいいぞ！2019》

共同代表より

MAP



開催概要

みなとメディアミュージアム（以下、MMM）は、茨城県ひたちなか市ひたちなか海浜鉄道湊線沿線を舞台に開催する地域アートプロジェクトです。毎年、全国からアーティストを募集し、厳正な審査を経て、出展者と作品を選出します。出展された作品は会期中（8月中、約3週間）、那珂湊の駅やまちなかを中心に、ひたちなか海浜鉄道沿線や車両内にも展示されます。またワークショップやその他関連事業の運営も行っています。「産（主に那珂湊地区商店街、ひたちなか海浜鉄道湊線）+学（主に大学教員、大学院生、大学生）+芸（アーティストおよび美術関係者）」の三者からなる実行委員会により運営されており、芸術表現と地域との協働によるまちの活性化を目的として活動しています。2009年に第一回を開催し、MMM2019では11回目の開催となります。

実行委員長挨拶

10周年であるMMM2019が終わってから今日まで、MMMにはたくさんの変化がありました。そのような出来事の根底にあったのは、10年という節目を踏まえつつ、新たなMMMを「再スタート」させるのだという私たちの決意です。そんないわば「勝負」の年であるMMM2019のテーマを「つながる。もともつながる。」といたしました。

主催 みなとメディアミュージアム実行委員会

共催 宝塚大学 常磐大学

後援 ひたちなか市 ひたちなか市教育委員会 ひたちなか海浜鉄道株式会社 おらが湊鐵道応援団 ひたちなか商工会議所

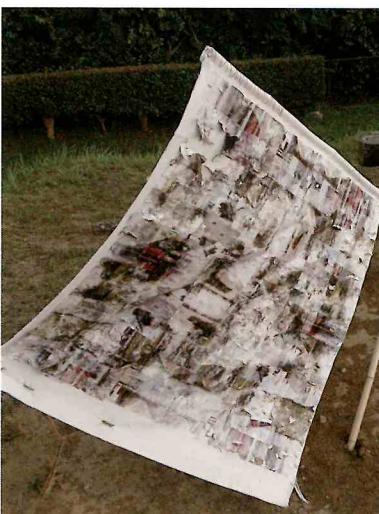
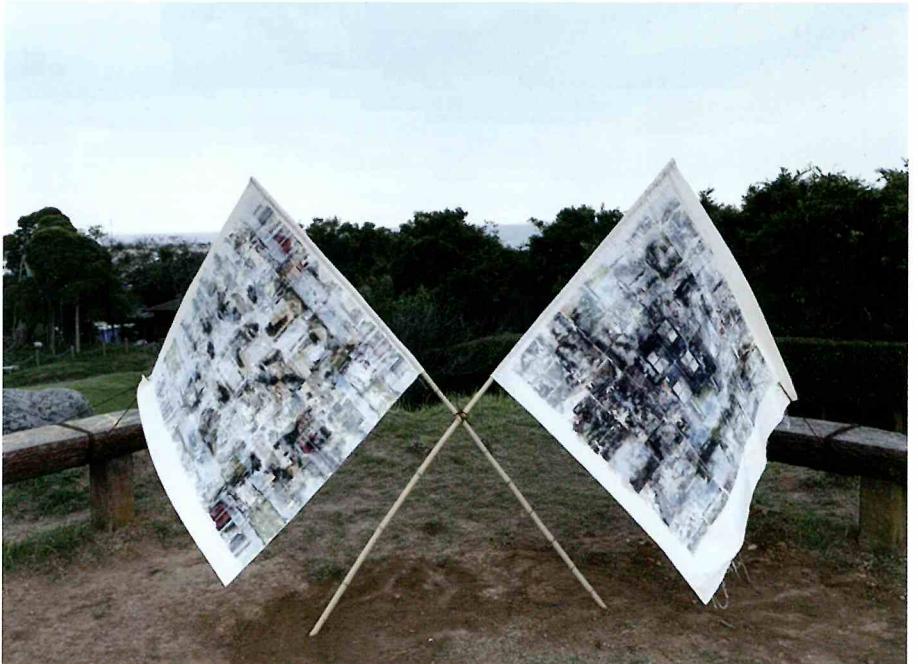
一般社団法人交通環境ネットワーク 環境芸術学会

協力 一般社団法人新宿メディア芸術地域活性化推進協会



佐々木樹 /Miki SASAKI

《Material poetry》—〈Topographic flags〉| NAKAMINATO / high school (2019)



本展では茨城県立那珂湊高等学校の生徒を対象に、学生それぞれにとっての「那珂湊らしい場所／風景／色合い」に関して、質問紙による統計調査を行った上で制作を行った。本展での制作の目的は、学生それぞれが抱く那珂湊に対する個人的記憶あるいは経験の集積とそれらの統計化を通して、個人的記憶と集合的記憶の境界について定性的かつ定量的に考察することにある。那珂湊高等学校に在学する学生たちの多くは卒業後、進路の関係から那珂湊を離れる傾向にあるという。彼らがある時どこかでふと高校生活を思い返す際に、本作品がそれを鮮明にさせる記憶の基点に建つものとなれば幸いである。

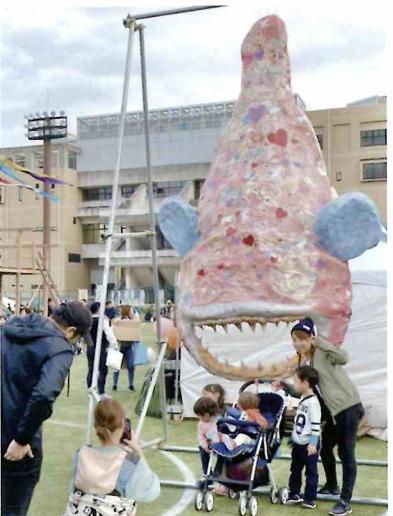
◎ 筆頭制作者 ◎ 佐々木 樹
○ 共同制作者 ○ 今宿 朱悠、高瀬 立樹、高田 彩加、羽賀 優希、山口 恵里佳
□ 破損発見者 (報告日時: 2019年8月24日23時)
□ 荒木 栄、鈴木 雄大、山口 恵里佳
△ 修復者 (修復日時: 2019年8月26日17時) △ 佐々木 樹、山口 恵里佳

Profile

詩人 / 美術家 /U.N.I.T. 主催
2015 年 法政大学社会学部社会学科 卒業
2017 年 日本大学大学院芸術学研究科文芸学専攻 修了
2018 年より現在 大正大学心理社会学部人間科学科 副手

増田荘は音を出してはいけない

あんこう♡もこもこ♡あんこう



一緒に写真を撮ると幸せになる大きなあんこう作りました！

写真提供(左上)：ひたちなか市

Profile

武蔵野美術大学の日本画学科と油絵学科を2014年に卒業。大学近辺にある木造アパート『増田荘』を拠点に制作活動を行う2人組編成のアートユニット。今回の MMM2019 を機に結成。互いの作家性をかなぐり捨て、現代に好まれる「バズる」作風を模索していく。



植田爽介

C.C.W



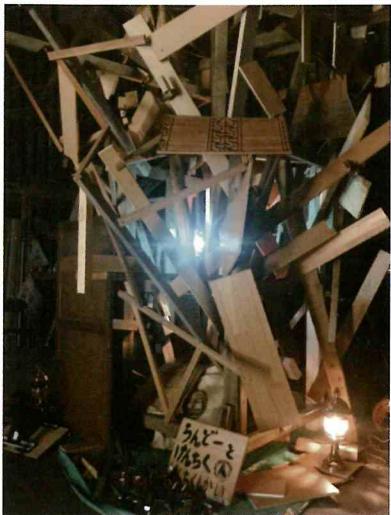
空間全体を含めた本作品（「C.C.W=Conversion and Connection Warehouse（変換と接続の蔵）」）は元々行事や催事、講演などを行うコミュニティースペースである百華蔵の空間をベースに、薄れつつあるコミュニティ（港、あるいは地域、あるいは個人）を視覚的に繋ぎ直す試みである。この空間において版画作品はコンバーター（変換装置）としての役割を持ち、永久的に変化し続ける港、地域、そして私達個人をこの場所百華蔵にて狭義的には個人同士を、広義的には未来へとこれからもつなげ続ける。

Profile

1994 香川県生まれ
2016 多摩美術大学美術学部絵画学科版画専攻卒業
2017 プラティスラヴァ美術大学（交換留学）
2016年度 三菱商事アート・ゲート・プログラム奨学生
2018 公益財団法人クマ財団第2期生
2019 東京藝術大学大学院美術研究科版画第一研究室修了

A+you

運動と建築と子どもの夢



CO₂排出に占める割合の上位は建設業界である。その課題に対し、我々は建築廃材に着目し、アートによる再生・利活用を行うことで、一般の人々に広く見て、感じて頂くことを目指します。体験型建築として、人力による発電を利用し、建築に動きを生み出します。少年のひと夏の思い出を表現した作品をベースとし、建築廃材を用いて動く建築作品として表現していきます。アートと人・人と地域の間を繋いでいくような作品を生み出します。

Profile

茨城県建築士会青年委員会発のアート集団です。メンバーは建築士であり、建築の様々なシーンで活躍する多種多様なバックグラウンドを持ったプロ集団です。アートを通じて建築の魅力や楽しさを多くの人々へ届けて行きたいと考えています。



奥田祥吾

Feeling of the waves 2019 - 波と雲と心よ、融合せよ -



波や雲のように、あるいは人間の心模様のように動的で有機的な状態で投網が張りめぐらされた那珂湊駅ホームの天井。このインスタレーションアートに遭遇した人々が、自身のiPhoneや携帯で撮影したひたちなか海浜鉄道湊線周辺の風景や思い出の写真をその場でダウンロード印刷し、七夕の短冊や神社の絵馬のようにメッセージや願い事を描いて頂き、ハートの折り紙を添えて天井の投網に吊るすことができるというもの。

会期中、風景のハートが増殖していく光景は、那珂湊やひたちなか海浜鉄道湊線沿いの人々の思いと記憶の集積であり、やがて未知なる“もこもこ状のハート群”が那珂湊駅ホーム天井に現れ始める。

Profile

1983 東京都生まれ
2006 日本大学理工学部海洋建築工学科 卒業
2008 武蔵野美術 大学院造形研究科 修了
2012 S.O.A.O 設立展覧会・受賞歴 [抜粋]
2018 表参道 ROKET(同潤館)
2006年学生設計優秀作品展・建築・都市・環境(LEMON展)/TDW(Thema Love)
2008年 MAU 修了制作優秀作品展学校賞

折田千秋

image picture



ひたちなか海浜鉄道の車窓からは黄緑の稲、茂った木々、青く広がる空が見えます。

こののどかな風景がひたちなからしい風景だと感じました。この作品では、景色を構成する田・森・空から印象に残った色を抽出してもらい、

印象の写真=「Image picture」を制作しています。

この電車を利用する人々に協力をお願いし、さまざまな景色の「Image picture」を集めました。

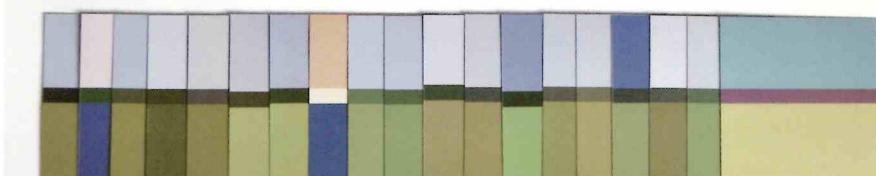
ひとりひとりの感じとった印象を、実際の車窓に展示しリアルとイメージを見比べることができます。

Profile

1993 青森県生まれ

2016 静岡文化芸術大学デザイン学部卒業

2018 東北大学大学院工学研究科都市建築学修了



君嶋海裕

六脚プロック積み木



同じ形のブロックを置いて繋げていくだけでオブジェになる積み木です。積み木の形は、海沿いの消波ブロックから、着想しました。

繋ぎ方次第で、伸ばしたり縮ませたり、雲のように形状を変えることができます。

つくりは簡単で、大小大きさが違っても繋がるので、端材(余った材)を活用して作ることができます。

MMMを見に訪れた人が、自由に触れられ、遊ぶことできる展示物です。

(株)稻野辺木工所さんに協力して頂き製作しました。

Profile

ものづくり大学 技能工芸学部 建設学科 卒業

鯨雄作&藤田崇文

ワキオコルトコロ



現代の絶え間なく沸き起こる情報の流れの源流
デジタルなピクセルにより表現される情報の無機質な表情を
多くの人が行き交う駅という場所で重ね合わせる
水が流れるように情報も変化を続けながら発信され
ケーブル（線路）を伝ってまた別の場所へ
目に見えない情報の流れを可視化する

Profile

鯨 雄作

2007年初個展(2013年から毎年開催)
2018年グループ展(東京大谷美術館)、展示参加(銀座三越)

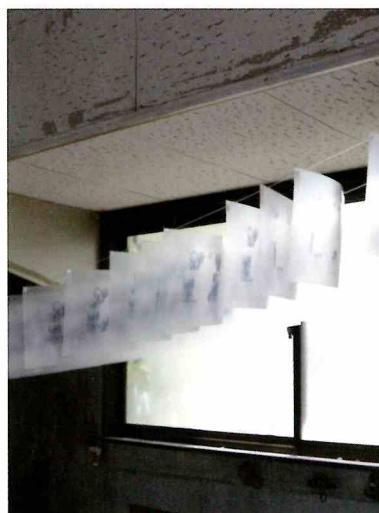
藤田 崇文

2009年東北芸術工科大学芸術学部美術科工芸コース卒業
陶器や木材などの素材を使いインスタレーション作品を制作



Daichi Ogawa

snow crystallography



これは雪の結晶図学。燐々と振り続ける雪の結晶を見つめると、個性豊かな幾何学が存在する。各々は様々な物語を持つ。地面に落ちて消えるもの、集合体となり、新しい幾何学を生むもの。私はこの生命たちを図学に要約した。

透明紙の上に焼き付く図学は1枚1枚違う幾何学をもち、レイヤー状に連なる。これは雪の結晶体の「生涯」を表している。

連なることで、現実の雪のように厚く、寒天のような透明感と非流動性、非運動性を包有する塊となり、切り離された冬の風景として宙に浮かぶ。

これは、目が捉えた一枚の静止画像としての風景ではなく、二次元的な視覚イメージを超えた、身体的な知覚体験を通して時間と運動を孕んだ風景となる。

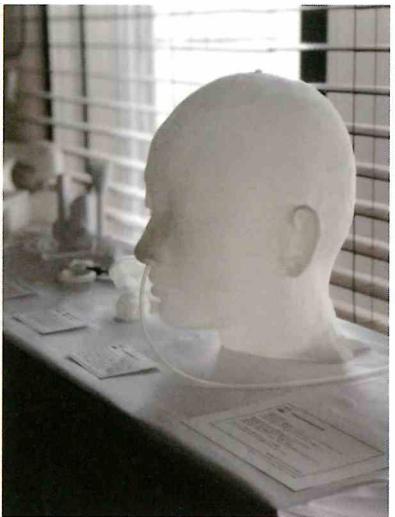
Profile

1994.11 新潟県生まれ

2017.3 公立大学法人長岡造形大学 建築・環境デザイン学科 卒業

Digital Hospital Art Project

Digital Hospital Art



「Digital Hospital Art」は、病院にデジタルアートの「魔法」のような体験を届けることで、退院後の世界や未来の可能性につながる「夢」を描いてほしいという願いからスタートしました。患者のケアニーズや医療現場のニーズをもとに、センシング方法から表現まで、デジタルアートの開発を行い、夢から達成すべき「目標」として具体化し、テクノロジーが寄り添うケアのあり方を目指しています。今回は、現地の医療機関や医療スタッフと協働して「那珂湊らしい Digital Hospital Art」を制作・展示します。

さらに、近しい未来にケアの現場で用いられる3Dプリント品を展示しました。

デジタルアートやデジタルファブリケーションなどのテクノロジーによる制作が、未来のケアのあり方を想起するメディアとしてのふるまうことをを目指しました。

協力：3D プリント品（協力：慶應義塾大学 FabNurse Project）

Profile

看護師 /Medical Design Engineer。

集中治療室や在宅での看護師の臨床経験をもとに、テクノロジーの医療現場への応用に取り組む。2014年より病院でのデジタルアート「Digital Hospital Art」をスタートし、患者・医療スタッフとともにデジタルアートを実践している。



HiroYuki Studio IN A DREAM



各国の都市に住んでいるアーバンキャットを観察することからプロジェクトはスタートしました。

彼らのスタイル・生活は人間と共に共感できる部分がとても多く、メディアの生と共に生まれたキャラクターたちは、同じ社会に生きる人々の共通な対話手段として発達を遂げてきました。

今日ではアートがポップカルチャーを利用する手段は一つの手法として確立されています。

そこで私は社会とアートの共存以上に、個人を尊重した個の優位性を考えたいと思いました。

キャラクターというメディアを使い、世界の政治・経済・社会問題を徹底的に個人的な解釈を施し、様々な国、環境、世代、立場が異なる人々とコミュニケーションできる作品を目指しています。

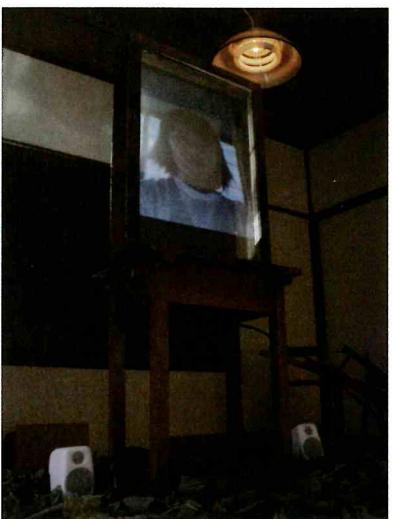
Profile

絵画・動画・インスタレーションなど、多様なメディアを使って作品制作するアーティストデュオ。

CoCo ソウル在住、ニュージーランド・オークランド大学で絵画・美術史専攻。Hiroyuki 東京在住、多摩美術大学で絵画専攻。現在は、社会問題を扱うアーバンキャット・プロジェクトを通じて キャラクターアート日記 -IN A DREAM-などのシリーズを作っています。

もにい

そして想像し違う



繋がることは物理的つながりのみではない。個々の繋がりたいという気持ちから個々が想像しあい、物理的実態とは違う能動性を持った眞的実体による繋がり、存在しない意識の空間を互いに補完することによって繋がることができる。
それはいつかの誰が座るかもわからない教室の机にひっそりとメッセージを残すように、意識の空間を私たちは補完する。

機材提供：筑波大学芸術系

Profile

2018 電通ADフェス「すだちガール」展示
筑波大学芸術祭2018「Battle!」メインビジュアル制作
100BANCH Garage Program 抽選「TSUKUBAX」projectリーダー
Design Scramble shibuya design festiva 「TRANSIONISTA」
長野県塩尻市「シェフが恋した塩尻野菜のスープ」開発プロジェクト
AD/D 担当
2019 100BANCHナナナ祭 -CONNECT-TSUKUBAX 生物×芸術企画/展



WACHAWACHA

発想はわちゃわちゃとしたところから



今村 緋莉、久保田 理世、半田 奈々子、南 麻里奈4名による
アーティストチームです。
那珂湊近郊でフィールドワークで得た発想を作品制作につなげ、展示を行いました。

Profile

2019 年武藏野美術大学芸術祭 WACHAWACHA
2019 年デザインフェスタ .49 輪茶一 WACHA



伊藤沙織

かっぱのきもち・おひとついかがですか



ちょっと上を向いて、ただ座っているだけの河童。「何を見ているの？」と目を覗いて聞いてみると。目の前を通り行く人を見送っているのか、空に浮かぶ雲の行方を見送っているのか。誰かが来るのを待っているのか、雨が降るのを待っているのか … 答えてはくれないけれど『となり、あいてるよ』とでも言いたい。ひとりでぼーっと座っているのも好きだけど、いつ誰が隣に来ても良いように、いつでも隣を空けてちょこんと座っている。河童の見つめる先には何があるのか。何を感じ、何を考えそこに座っているのか。そんなことを想像しながら見てほしい作品です。ぜひ隣に座ってそこに流れる時間を一緒に感じてみてください。この作品を見た人がちょっと笑ってしまったり、優しい気持ちになれたらいなと思いながら制作しました。

Profile

多摩美術大学 美術学部 工芸学科 金属専攻 卒業

おさむシアター



「ケハ601」は、1960年新潟鉄工製のステンレス気動車。
そのレトロ車両が映画館に大変身！
中には列車の座席に座って映画の旅を楽しめる唯一無二の空間が広がっています。モチーフは湊線の駅猫「おさむ」から。



平松悠
1985年 東京生まれ。
2009 女子美術大学芸術学部
デザイン学科卒業
2019 東京藝術大学大学院映像研究科
アニメーション専攻修了



開發道子
1992年 北海道出身。
2017 金沢美術工芸大学
美術工芸家油画専攻卒業。
2019 東京藝術大学大学院映像研究科
アニメーション専攻修了



ささきえり
1995年 千葉県生まれ。
東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻修了。
現在は、イラストレーター・アニメーション作家として
フリーで活動中。
たのしく制作している。



村松怜那
2016 金沢美術工芸大学油画専攻卒業
2019 東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻卒業
自身の制作と並行して、立体や平面のアニメーション、ワークショップに関わるなど、フリーで精力的に活動中。



岡田章吾
東京藝術大学出身。
在学中にイラストレーターとしての活動を始める。
現在は同大学院アニメーション専攻に在籍し個人製作を
しながら、主に書籍の表紙やアニメのイメージボードを
中心に手がけている。

那珂湊第一小学校ワークショッププロジェクト

43/ 宝塚大学東京メディア芸術学部デザイン表現研究室



2015年から那珂湊第一小学校の協力を得て4,5年生を対象にワークショップを実施しています。今年度も児童、アーティスト、スタッフの協力で作品を作り上げます。こうした経験が、この街で暮らす子供たちの考える力、つくる力を育むことにつながることを願っています。

【BANKOKKI】

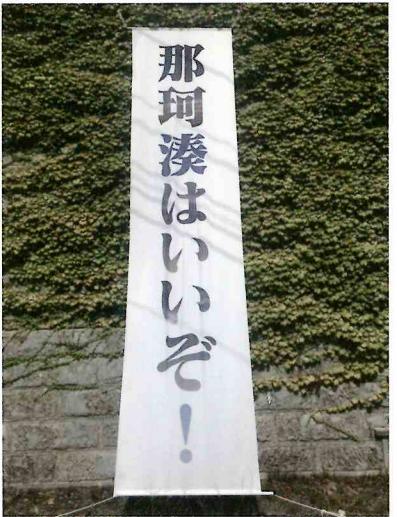
BANKOKKI は 1 つ 1 つの旗を小学生に制作してもらい、その個性ある旗をしばしば笑みを浮かべながら良く眺めて並び方を調整し“万国旗”的形式で展示する作品です。2016 年から毎年繰り返しています。回を重ねていくほどに、数量も、色や柄のバリエーションも、制作してくれた生徒の数も増えています。象徴、目印、装飾、そのどれかの意味に特化しない個性ある旗の集まりは、大きなうねりとなって、この街の新たな意志の表れのように成長していくことと思います。

【ヘッドマークデザインワークショップ】

木材合板とカラーフェルトを用いて立体的に制作するヘッドマークデザインワークショップを実施します。ヘッドマークは、那珂湊駅のマスコット猫「おさむ」と「ミニさむ」をモデルに 4 タイプ制作。ひたちなか海浜鉄道の協力により、ワークショップ終了後から開催される MMM の期間中、営業列車に取り付け走行します。

中村やす

那珂湊はいいぞ！ 2019



本作は「フラッグ」という形式は維持しつつも、2016年の那珂湊第一小学校でのワークショップ形式から、2017,2018年に「那珂湊はいいぞ！」という言葉のみによる表現へと変化してきた。2019年は大量のフラッグによる「数は力だ」から、1つのみの「大きいことはいいことだ」への転換を行う。なお、作者はガルパンおじさんである。アニメ「ガールズ&パンツァー」は隣町の大洗が舞台じゃないかとおっしゃるかも知れないが、登場キャラクターにはひたちなか市出身という設定のキャラクターが複数おり、関係ないわけではない。ガルパンはいいぞ！

Profile

大阪生まれ

筑波大学大学院芸術研究科デザイン専攻総合造形分野修了

宝塚大学東京メディア芸術学部准教授

現代美術家

近年はワークショップを中心とした創作・プロデュース活動に移行しつつある。



共同代表より

細谷菜々子

MMM11年目の今年は、「つながる。そもそもつながる。」をテーマに開催しました。テーマ通り、作家さん、那珂湊に来てくれた方、私たちスタッフ、支えてくださった地域の皆さんが出合い、繋がることのできるきっかけづくりができたのではないかと思います。MMMの開催は夏だけという短い期間ですが、この間に生まれた出会い、繋がりがこの先も那珂湊に残っていくことができれば幸いです。MMM11年目、新しいスタートに自分が少しでも携わることができたことをとても嬉しく感じます。関係者の方々、地域の皆様、MMM2019に携わって下さった全ての方に心から感謝申し上げます。

田中玲伊

今年は作家様、お客様、運営する学生スタッフ、そして地域の方々を様々な形でつなげる架け橋にならせてもらいたいという想いのもと、「つながる。そもそもつながる。」というテーマが産まれました。そして感動が胸に押し寄せるほど素晴らしい作品に出逢うことができました。展示は終了しましたが作品は人々をつなげるメディアとして今も尚、任務を遂行し続けていると思います。想像を超える独特な、なおかつ地域に受容される魅力的な表現のその前に、様々な方がそもそもつながっていた MMM2019 が終了致しましたことを関係者及び地域の方々へ心より感謝申し上げます。

鈴木雄大

MMM2019が無事終了致しました。ご参加・ご協力下さった全ての方に心から感謝申し上げます。「つながる。そもそもつながる。」という解釈が難しいテーマであったにも関わらず、様々な素敵なお解釈が生み出され、沢山の人が「そもそもつながる」ことができたのは、MMM2019に関わって下さった皆様一人一人がこのイベントへ真剣に向き合って下さった証拠であると思います。このテーマも相まって、皆様が様々な形で表現して下さった「そもそもつながる」一つ一つが作品のように感じることができ、つながりというものの大切さを再認識することができました。展示自体は終了致しましたが、このつながりは今後も私たちの人生においてかけがえのないものであり続けることだと思います。来期はより地域に密着し、より多くの方々に来ていただき、より沢山の素敵なお繋がりを生むイベントにしていきたいと思います。改めまして、MMM2019に関わって下さった全ての方に心から感謝申し上げます。今後ともみなとメディアアミュージアムを宜しくお願い致します。

山口恵里佳

今年もMMMを開催することができたこと、大変嬉しい思います。MMMは今年で11年目となります。MMM2019は10年間で積み上げられたものとこれからをつなぐための重要な年であったと思います。そんな今年のテーマは「つながる。そもそもつながる。」。展示された作品は、私たちの想像を超える、アーティストそれぞれのさまざまな解釈のもと生まれ、新たな場所や人との出会いを生み出し、会期を通しての作品自体の変化も伴うことによって鑑賞者に新たな気づきをもたらしていました。私は8月の大半を那珂湊で過ごしました。那珂湊に滞在すればするほど、場所性を知ったり、訪れたことのない店を見つけたりと、新たな発見が増えました。しかし、発見には喜びだけでなくものも時に現れます。MMM2019を通して私は、発見者は自分の気づきを内に秘めるのではなく、多くの人にその発見を伝える義務があるのだと思いました。MMMを今後も続けていくにあたり、皆が共に発見し合いながらそれらを伝え、動くことができる気づきのある芸術祭になるよう、実行委員一同精進してまいります。最後になりましたが、MMMは関わってくださった皆様、そして本展はなにより那珂湊の方々の協力があってこそ成り立ちます。心より感謝申し上げます。

有本翔一

今年もMMMが終了いたしました。お力添えをいただいた皆様ありがとうございました。今年は「つながる」というワードを重視して活動をしていました。その中でうまくいったこともあれば、うまくいかなかったこともあります。うまくいかなかったことに関してはこれから改善し、来年の運営に役立てていきたいと考えています。そしてうまくいったところは来年以降も継続、発展させ、より良い団体にしていきたいと考えています。自分としては企画に、キュレーションに、とても大変な年になりましたが、なんとかやりきることができました。これもひとえに今年支えていただいた皆様のおかげです。支えていただいた皆様に感謝を申し上げます。今後とも、みなとメディアアミュージアムをよろしくお願ひいたします。

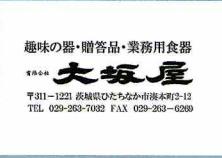
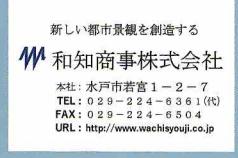
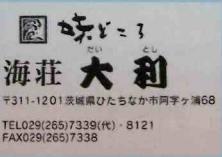
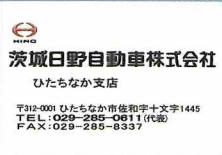
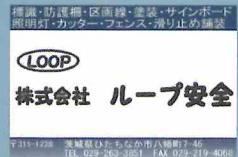
今宿未悠

MMM2019が、終わりました。お力添えをいただいた全ての方々、ありがとうございました。「つながる。そもそもつながる。」というテーマが様々に解釈され、それぞれの芸術としてかたちになったMMM2019。共同代表としてこのイベントを振り返ると、様々な「気づき」が投げられ、それをあらゆる立場の垣根を超えて、共有することが図られた期間だったなど感じています。産・学・芸それぞれの「役割」についての気づき。そしてそれら主体が「つながる」上での気づき。多方面から投げられた、たくさんの「気づき」について、一つの視点にとらわれてしまうことなく柔軟に、そして真摯に向き合ってまいりたいです。来年に向けて、進化、というより変態してまいります！ありがとうございました。

打木俊汰

MMMが今年も会期を終えることが出来ました。お力添えを頂きました皆様、誠にありがとうございました。今期は運営体制の変更もあってかこれまで見えてこなかった様々な課題や問題に気付かされました。決して順風満帆な運営とは行かず、トラブルも多々ありましたが、一先ず会期を終えることが出来たことに胸を撫で下ろしております。また今年は優秀な新人スタッフが多く、その存在に幾度も助けられました。彼等が中心となるこれから MMM を密かに待ち遠しくも思っております。来期は今回露呈された課題を解決し、またこれまで以上に地域との繋がりを意識した運営ができるよう尽力してまいります。改めまして、今期お世話になりました皆様に感謝申し上げます。今後とも MMM を宜しくお願い致します。発見には喜びだけではないものも時に現れます。MMM2019を通して私は、発見者は自分の気づきを内に秘めるのではなく、多くの人にその発見を伝える義務があるのだと思いました。MMMを今後も続けていくにあたり、皆が共に発見し合いながらそれらを伝え、動くことができる気づきのある芸術祭になるよう、実行委員一同精進してまいります。最後になりましたが、MMMは関わってくださった皆様、そして本展はなにより那珂湊の方々の協力があってこそ成り立ちます。心より感謝申し上げます。

協賛



制作 札幌市立大学 MMM記録集作成チーム
佐野弥詩・高野友夏・宇野成美・田邊乃映
監修 一般社団法人新宿メディア芸術地域活性化推進協会

